

公表 事業所における自己評価総括表

○事業所名	特定非営利活動法人 杜の家 りゅうそう放課後ラボ		
○保護者評価実施期間	令和7年3月18日		～ 令和7年3月23日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	34人	(回答者数) 17人
○従業者評価実施期間	令和7年3月14日		～ 令和7年3月19日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	7人	(回答者数) 7人
○事業者向け自己評価表作成日	令和7年3月24日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	生活空間は、障がいの特性に応じて本棚やロッカーの配置等を見直したことや一人の空間で気持ちを落ち着かせたい子や痙攣が起きた時には、落ち着く部屋や個室の確保が出来るようにしている。	本棚やロッカーの家具の配置等については、子どもが来所したときに、まずは『ロッカーに荷物を入れる』『お手紙』『手洗い』と一連の動きが出来るように工夫している。また落ち着く部屋では窓はなくカーテンで仕切られているため、少し薄暗い部屋となっており、周りの視線を気にしないで良いようにしている。	活動に合わせた空間が出来ていない。例えば『勉強部屋』がないため、周りに遊び道具がある空間になり、注意散漫となる要因になってしまう。そのため、なるべく物を最小限にすることや見えないようにカバーをする等して、『勉強する時』と『遊ぶ時』を切り替えが出来るようにする。
2	ご家族からの子どもの自宅や学校等での様子を聞き、支援の取り組みに発展させている。	日頃のお手紙でのご家族からの連絡事項にて記載されている子どもの様子から情報を得ることやこちらでの様子やそのことについての考えを記載しているやり取りの中で、より子どものことについて詳しく知ることが出来る。そのため、ご家族の視点を職員同士でのミーティングで共有していき、支援にどう組み込んでいくのか考えることが出来る。また、こちらで子どもの気になった様子があれば、LINEやお電話にて伝えている。	現在は子どもとの関わりの中で気になった点があった時に子どもの気持ちを確認することが多いが、本人がどのようにこちらのことを思っているのか、困っていること、将来どのような道に進みたいのか等、細かい部分まで本人の意向を聞くことで、より具体的に支援を考えていく。
3	PDCAサイクルを業務に反映している。	職員同士で情報共有、意見交流をしているミーティングでは、PDCAサイクルを意識している。特に『Action(改善)』では一連でしてきた業務の評価までした後は、他にどう改善していけば良いか、どのように今後も活用していけるのか、具体的に考えていけるようにしている。	こちらで行っている業務に何が足りないのか、どこを見直す必要があるのか等、外部からの評価や研修を通して新たな視点を取り入れていき、広い視点で業務が遂行出来るようにする。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	地域との交流の少なさ。	公民館や工場見学等に行っていたが、新型コロナウイルス感染症が流行してからは、地域との交流が激減して、近くの公園で地域の子どもたちとの関わりのみとなった。	現在も新型コロナウイルス感染症は続いていることもあるため、少しずつ地域との交流を拡大していけるように、スーパーや駄菓子屋等、身近にあるお店から関わりを増やしていく。
2	日々のお手紙でのご家族とのやり取りにおいて、その日の活動内容や避難訓練の情報を全体連絡することもあるが、こちらの情報の発信の少なさがある。	ホームページに活動情報を載せる時に楽しさをそのまま伝えるために子どもの顔写真を載せることになってしまいが、本人が大人になった時に抱く気持ちを考慮して、法人としてその方法をしないという考えになっている。	いつもとはまた違った活動をする時には子どもの顔写真ではなく、雰囲気の写真や活動に活用したものを全体連絡やホームページに上げる等をして、取り組みについて知ってもらう。
3	てんかん発作やアレルギーがある子への対応の実践の経験が少ない。	現在こちらを契約している子で、てんかん発作がある子が1人とエビペンが必要になる子が来年度から利用する子が1人と合計2人となっており、特にエビペンが必要になる子が今までにはいなかった。	去年講習で全職員がエビペンの使い方について学ぶ機会を設けた。その内容を基にどういった対応をしていくことが良いのか、すぐに対応が出来るように改めて周知するとともに、対応についてまとめた資料を職員がいつでも見えるようにしておく。